

## 投稿論文

# 看護技術学習のレディネス形成を目指した 技術評価演習での学生の学び — 1 年次の状況設定課題終了後のレポート分析 —

一條 明美\* 神 成 陽 子\* 升 田 由美子\*

### 【要 旨】

本研究の目的は、状況設定課題による技術評価演習終了後に学生が記述したレポートから学生の学びの内容を明らかにし、学生の看護技術学習に関するレディネス形成について検討することである。

研究同意のあった看護系大学1年生53名を対象とし、授業で行った技術評価演習終了後のレポートをデータとし、学習状況、学習課題、今後の学習方法、技術評価演習での気づき・学びについて質的記述的に分析した。分析の結果、学生は【学生同士の意見交換】【教科書を活用】【反復練習】などの事前学習を行い、【患者のことを考える】【目的・根拠を考える】【技術の向上】を学習課題ととらえていた。また、【練習不足】【技術が身につけていない】【根拠の重要性】【学習成果】などの気づき・学びがあり、今後の学習方法は【他者と練習・意見交換】【反復練習】【教科書を活用】であった。自らの看護技術学習を客観的に評価し、今後の課題、学習方法を考えることは、レディネス形成を促すことにつながったと考える。

**キーワード** 看護技術、看護技術習得状況、レディネス、看護学生、動機づけ

## I. はじめに

看護基礎教育における看護技術の習得に関しては、その重要性が強調されて久しい。現代の若者にどのようにして技術を習得させるか、看護教員は様々に工夫し、日々の教授活動を行っている<sup>1) - 8)</sup>。技術を習得するには認知領域、運動領域、精神領域の3方向から教授する必要がある。

看護技術習得には反復練習が必要である。1回の講義・演習で看護技術が身につくことはなく、学生は講義・演習の後に主体的な自己学習、反復練習が必要となる。また、学生個々の学習ニーズに合わせた個別指導が必要な場合もある。低学年の看護学生は自己の看護技術を客観的に見ることはできず、また、他の学生もアドバイスをするには至らない。

本学では、1年次で履修する基礎看護技術学Ⅰで看護の基礎となる共通技術（バイタルサインの観察、感染予防など）と日常生活行動に関する看護技術を教授している。また2年次では基礎看護技術学Ⅱで診療・検査に関する看護技術を教授している。基礎看護技術学Ⅰでは反復練習の動機づけ、個別あるいはグループごとの指導を目的に実習室アワーを設けている。さらに個別指導の機会とすること、実施時点での看護技術の他者評価を受けることを目的に技術チェックを設け実施してきた。

基礎看護技術学Ⅰでは、年間3～5つの看護技術について各単元終了時に技術チェックを実施し、全単元が終了した冬季休業後に、全単元の看護技術を対象に状況設定課題による技術評価演習（以下、技術評価演習）を実施してきた。技術評価演習のねらいは、学生

\*旭川医科大学 看護学講座

自身が①看護技術の習得状況および学習内容を確認する、②観察者になることで評価の視点をもつ、③患者体験から安全・安楽について考える、④技術評価演習の学習過程を振り返り自己の学習課題を明確にし、今後の学習方法を具体的に考えることである。そのため、技術評価演習では、教員評価に加えて、観察者（学生）をおき観察者による評価および患者役（学生）による評価を行った。さらに観察者評価と患者役評価および自己評価に基づき、学習状況、学習課題、今後の学習方法、技術評価演習を通しての学びをレポートした。

学生の学習が円滑に進み学習目標が達成されるためには、ある程度のレディネスが備わっていることも必要と考えられる。レディネスとは準備性と訳され、効果的に授業を実施するための発達の・学習的・態度的・社会的準備性を指す<sup>9)</sup>。我々は、学生が技術評価演習に向けて学習したことが学生のレディネス形成につながり、さらに専門的な学習となる基礎看護技術学Ⅱが能動的に学べるようになることを目指している。先行研究<sup>1) - 8)</sup>では、看護技術の教授方法や試験方法に関する報告、学生の学習方法や自己評価に関する報告はある。しかし学生のレディネス形成という視点で考察した研究報告は多くはない。状況設定課題による技術評価演習からの学びについて、看護技術学習のレディネス形成に着目し、検討することで、看護基礎教育の中での看護技術教育の示唆が得られると考える。

## Ⅱ. 研究目的

1年次の状況設定課題による看護技術評価演習終了後に学生が記述したレポートから学生の学びの内容を明らかにし、学生の看護技術学習に関するレディネス形成について検討することである。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 対象

看護系大学1年生で状況設定課題による技術評価演習を受けた60名

### 2. データの収集場所と期間

データ収集場所はB看護系大学で、データ収集期間は2010年2月であった。

### 3. データ収集方法

1) 技術評価演習終了後、学生は各自が行った看護援助を振り返り、以下の視点でレポートを記述した。

- (1)与えられた看護援助を実施するために必要な観察項目とその根拠
- (2)実施した看護援助の振り返り
- (3)技術評価演習までの事前学習状況
- (4)看護技術を身につけるための自己の課題と今後の学習方法

2) 上記(1)~(4)のうち、(3)(4)の記述をデータとした。なお、技術評価演習の概要を表1に示した。

表1 状況設定課題による技術評価演習の概要

ねらい	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これまでに学習した看護技術の習得状況、学習内容を確認する</li> <li>2. 観察者になることで評価の視点をもつ</li> <li>3. 患者体験から安全・安楽について考える</li> <li>4. 技術評価演習の学習過程を振り返り自己の学習課題を明確にし、今後の学習方法を具体的に考える</li> </ol>
方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>①学生（以降、「実施者」とする）に、事前に11の状況設定課題を提示し、患者の様子をイメージできるよう説明し、学習を促した。「実施者」は技術評価演習当日、教員から指示された課題を実施した</li> <li>②「実施者」「患者役」「観察者」の3人1組で行った</li> <li>③1人の実施時間は20分とした</li> <li>④実施終了後「観察者」「患者役」は、「実施者」が行った看護技術の評価を指定の用紙に記載し、「実施者」へ渡した</li> <li>⑤「実施者」は技術評価演習終了後、以下の視点でレポートを作成した             <ul style="list-style-type: none"> <li>・指示された看護援助を実施するために必要な観察項目とその根拠</li> <li>・実施した看護援助の振り返り</li> <li>・技術評価演習までの事前学習状況</li> <li>・看護技術を身につけるための自己の課題と今後の学習方法</li> </ul> </li> </ol>
状況設定課題例	<p>例1 患者の様子：患者は二部式病衣を着用している。右半身に麻痺がある。右肘関節に拘縮があるため、運動に制限がある。</p> <p>場面：患者は本日入院した。初回のバイタルサインの観察のため訪室する。</p> <p>例2 患者の様子：長病衣を着用している。衰弱しており、他者の介助がないと体位を変えられない。左前腕より点滴静脈内注射中である。ベッドの両サイドにはベッド柵が設置されている。</p> <p>場面：本日はリネン交換日である。リネン交換実施のために訪室した。</p>

#### 4. 分析方法

舟島の Berelson, B. の方法を参考にした看護教育における内容分析<sup>10)</sup>に基づき、得られたデータを質的記述的に分析した。

第1段階：以下の4つの問いをたて、問いに対する回答に該当する記述を素データとした。

問1 学生は技術評価演習までにどのような学習をおこなったか

問2 学生の学習課題は何か

問3 学生は今後どのような学習方法で学ぼうとしているか

問4 技術評価演習の気づき・学びはなにか

第2段階：素データから意味内容を損なわないように文脈単位を決定した。さらに問いに対する回答1つのみを含むように、文脈単位を記録単位へと分割した。

第3段階：記録単位を概観し、出現頻度の高い内容(単語)をキーワードとして同一表現の記録単位、表現は少し異なるが意味内容が同一の記録単位、検討を要する記録単位に分類・整理した。

第4段階：第3段階で分類・整理された記録単位群を、上記4つの問いごとに意味内容の類似性に基づいて共通要素を抽出した。

分析は妥当性、信頼性を高めるために看護基礎教育に10年以上従事する教員3名で行った。

#### 5. 倫理的配慮

本研究は研究者が所属する機関でデータ収集を行うこと、学習内容の一部をデータとして使用することから、対象は研究協力を拒否することで学習上何らかの不利益を被るのではないかと懸念することが予測される。そのため、研究協力の依頼は技術評価演習の全過程終了後に行い、以下の内容を口頭と文書で説明し、同意書とレポートの提出をもって、研究協力の同意を得た。

- 1) 研究の参加は自由意思であり、同意しなくても当該科目の成績に影響しないこと
- 2) 研究同意後に同意を撤回でき、研究同意を撤回してもその後の学習活動には影響しないこと
- 3) データはID番号を付け匿名性を確保すること
- 4) データは研究以外に用いないこと
- 5) 研究終了後、データは裁断の上破棄すること
- 6) 研究結果は、学会等での発表および学会誌等へ

投稿すること

## IV. 結果

研究に同意のあった1年生53名のレポートを分析した。

レポートから得られたデータは230文脈単位で、問いに対する回答1つのみが含まれた記録単位は618記録単位であった。うち意味内容が不明な22記録単位を除外し、596記録単位を分析対象とした。

### 1. 学生は技術評価演習までにどのような学習をおこなったか

記録単位は200記録単位、22の共通要素(【 】は共通要素)が抽出された(表2)。共通要素と記録単

表2 学習状況の共通要素 (n=200)

共通要素	記録単位数 (%)
学習期間	51 (25.5)
学生同士の意見交換	34 (17)
教科書を活用	20 (10)
反復練習	19 (9.5)
課題の練習頻度	19 (9.5)
友人と練習	9 (4.5)
より良い方法を考えた	8 (4)
手順等を覚えた	8 (4)
教員・友人に教えてもらった	8 (4)
安全・安楽を考えた	4 (2)
イメージトレーニング	3 (1.5)
患者に合わせた方法を考えた	3 (1.5)
計画的に練習した	2 (1)
家族を相手に練習した	2 (1)
練習後振り返った	2 (1)
復習してから練習	2 (1)
その他	6 (3)

表3 学習状況の記録単位列

共通要素	記録単位 (数)
学習期間	2週間前 (17)
	冬休み明けから (8)
	冬休み中から (6)
	放課後・昼休み (5)
	3週間前から (3)
	1週間前から (3)
	冬休み前から (2)
	10日前から (1)
	その他 (6)

位例を表3に示す。【学習期間】に関する記述が最も多く51記録単位であった。次いで、【学生同士の意見交換】34記録単位、【教科書を活用】20記録単位、【反復練習】、【課題の練習頻度】各19記録単位、【友人と練習】9記録単位、【より良い方法を考えた】【手順等を覚えた】【教員・友人に教えてもらった】各8記録単位、【安全・安楽を考えた】4記録単位、【イメージトレーニング】【患者に合わせた方法を考えた】各3記録単位、【計画的に練習した】【家族を相手に練習した】【練習後振り返った】【復習してから練習】各2記録単位、その他6記録単位であった。その他には【他者を観察した】【苦手な技術を後回し】【プリント・メモを活用】【図書館で調べた】【ポイントをノートにまとめた】【予習と過去の演習を参考に実施】があった。

## 2. 学生の学習課題は何か

91の記録単位から5つの共通要素が抽出された(表4)。学習課題は【自己の看護行為】と【患者のこと

表4 学習課題の共通要素 (n=91)

共通要素	記録単位 (%)
自己の看護行為	25 (27.5)
患者のことを考える	24 (26.4)
目的・根拠を考える	22 (24.1)
技術の向上	12 (13.2)
観察する	8 (8.8)

表5 今後の学習方法の共通要素 (n=125)

共通要素	記録単位 (%)
他者と練習・意見交換	26 (20.8)
反復練習	17 (13.6)
教科書を活用する	15 (12)
自分なりの学習方法	15 (12)
予習・復習する	11 (8.8)
患者の視点を持つ	9 (7.2)
目的・根拠を考える	6 (4.8)
体を動かして学ぶ	6 (4.8)
安全・安楽を考える	5 (4)
評価する	5 (4)
練習の心構え	3 (2.4)
コミュニケーション	3 (2.4)
援助に必要な知識	2 (1.6)
机上の学習をもとに技術を身につける	1 (0.8)
定期的な自己練習	1 (0.8)

を考える】が各24記録単位で約半数を占めた。他に【目的・根拠を考える】【技術の向上】【観察する】であった。

## 3. 学生は今後どのような学習方法で学ぼうとしているか

125の記録単位、15の共通要素が抽出された(表5)。今後の学習方法は、【他者と練習・意見交換】【反復練習】【教科書を活用する】【自分なりの学習方法】【予習・復習する】【患者の視点を持つ】【目的・根拠を考える】【体を動かして学ぶ】【安全・安楽を考える】【評価する】【練習の心構え】【コミュニケーション】【援助に必要な知識】【机上の学習をもとに技術を身につける】【定期的な自己練習】であった。

## 4. 技術評価演習の気づき・学びはなにか

気づき・学びは180の記録単位から29の共通要素が抽出された(表6)。もっとも記録単位が多かった

表6 気づき・学びの共通要素 (n=180)

共通要素	記録単位 (%)
練習不足	22 (12.2)
技術が身につけていない	21 (12)
根拠の重要性	16 (8.9)
学習成果	13 (7.2)
反省	12 (6.7)
専門基礎科目の必要性	9 (5)
効率の悪い練習	9 (5)
患者体験の重要性	7 (3.9)
練習期間の不足	6 (3.3)
評価の不足	6 (3.3)
他者評価の有効性	6 (3.3)
患者に対する視点	6 (3.3)
観察・コミュニケーションが必要	6 (3.3)
反復練習の必要性	5 (2.8)
合格のための練習	5 (2.8)
患者把握の必要性・重要性	4 (2.2)
知識の必要性	4 (2.2)
技術の練習だけでは不足	3 (1.7)
予習・復習の重要性	3 (1.7)
根拠を考えていなかった	3 (1.7)
予習は課題だけだった	2 (1.1)
必要な学習方法	2 (1.1)
丁寧な技術	2 (1.1)
手早さだけでは不十分	2 (1.1)
無駄を減らす	2 (1.1)
その他	4 (2)



のは、【練習不足】次いで【技術が身につけていない】  
【根拠の重要性】【学習成果】【反省】【専門基礎科目の  
必要性】【効率の悪い練習】【患者体験の重要性】【練  
習期間の不足】【評価の不足】【他者評価の有効性】【患  
者に対する視点】【観察・コミュニケーションが必要】  
などであった。その他には【援助の目的を理解してい  
れば自信を持って援助できる】【自分で考え判断する  
ことが求められる】【援助の方法工夫できることが分  
かった】【技術を学ぶ目的を意識していなかった】が  
あった。技術評価演習の気づき・学びの記録単位例を  
表7に示す。

## V. 考察

### 1. 学生は技術評価演習までにどのような学習をおこ なったか

学生の記述は【学習期間】に関する内容が最も多かつ  
た。今回行った技術評価演習では11の状況設定課題  
を事前に学生へ提示している。学生は、提示された学  
習をする際、いつから始めるか、計画性を持って取り  
組んだことが考えられる。また学生が技術評価演習に  
関する学習を振り返った際、具体的な努力を反映する  
ものであり記述が多かったと推測する。

具体的な方法では、【学生同士の意見交換】【友人と  
練習】【教員・友人に教えてもらった】から学生は一  
人ではなく、教員に助言を受けたり、複数の友人と共  
に学んでいたことがうかがえる。また、【よりよい方  
法を考えた】【患者に合わせた方法を考えた】から、  
良い援助のために自己の技術学習を振り返り、検討し  
ながら繰り返し練習したと推測する。【教科書を活用】  
から、学生は状況設定課題に取り組むことで、これま

で学習してきたこと、看護技術の原理・原則を確認し  
ながら、状況設定の患者に適した援助方法を考えてい  
た。その中で、安全・安楽の検討、患者に合わせた方  
法の検討、が行われたものとする。

### 2. 学生の学習課題は何か

学生は振り返りを通して【自己の看護行為】への課  
題を明らかにしていた。同時に【患者のことを考える】  
という、自己の課題を明確にしていた。今回の技術評  
価演習では、様々な状況が設定されており、その課題  
を行っていく中で、看護援助の対象が患者であることを  
再認識したものとする。そして患者に適した看護  
援助を提供するには、【目的・根拠を考える】という  
ように、それらが明確になっていなければならないと  
気づき、その重要性を課題としてとらえていた。技術  
評価演習では、患者の状況設定とどのような場面か  
について提示している。看護実施場面で、安全に援助を  
提供するためには、【技術の向上】とともに【観察する】  
が必要であることに気づき、それらを学習課題として  
認識していたと考える。

### 3. 学生は今後どのような学習方法で学ぼうとしてい るか

技術評価演習までの学習状況と同様に【他者と練習・  
意見交換】【反復練習】【教科書の活用】が抽出された。  
学生は技術評価演習の学習を通し、これらの学習方法  
の必要性や有効性を認識したと考える。また、自己の  
学習過程を振り返ることによって日々の予習復習の重  
要性にも気づいたと思われる。

### 4. 技術評価演習の気づき・学びはなにか

学生は技術評価演習に向けて繰り返し練習する過程  
で、【練習不足】や【技術が身につけていない】ことに  
気づいたと考えられる。技術評価演習は、学生が自分  
自身の看護技術の習得状況をとらえなおす機会となっ  
たと考えられる。未熟な自己を受け止めることは次の  
学習へのステップとして重要と考える。また、学生は  
学習過程で気づいた自己の課題を達成するために友人  
と意見交換したり、教科書を活用するなどして学習を  
進め、自己の学習課題や学習方法を明確にしていっ  
たのではないかと考える。

【学習成果】は「上手になった」「十分練習した」「自

表7 気づき・学びの記録単位例

共通要素	記録単位 (数)
学習成果	上手になった (4)
	十分練習した (3)
	自信がついた (2)
	観察できるようになった (2)
	苦手意識がなくなった (5)
専門基礎科 目の必要性	他の科目と看護を関連させて学習する (3)
	病気や専門用語を復習する (2)
	解剖生理学と的根拠を理解し練習する (2)
	専門基礎科目を学習する (1)
	患者の観察・判断には様々な分野の知識が必要 (1)

信がついた」などの記録単位で構成された。学習成果に自ら気づくことができたことは学習意欲につながり、動機づけの強化につながったのではないかと考える。さらに、【専門基礎科目の必要性】が抽出された。専門科目を学ぶ上で専門基礎科目が重要であることは言うまでもなく学生も認識していることではあるが、状況設定課題に取り組むことによってその重要性が再認識されたものと考ええる。

## 5. 看護技術学習のレディネス形成

大学基準協会<sup>11)</sup>から「看護専門職にあるものは、多様にしかも急速に変化しつつある社会状況を認識し、生涯を通して最新の知識、技術を学習し続ける」と期待される看護専門職像について提言が出された。看護職者は生涯、専門職として学習を続けなければならない。そのためには、看護職になる前、すなわち基礎教育のなかで人間が本来的に持っている自己教育力を発展させる必要がある。自己教育力は自ら学ぼうとする意志・意欲・能力であり、自己教育力を持続させるためには学習のための動機づけが必要である。動機づけには外発的動機づけと内発的動機づけがある<sup>12)</sup>。自己教育力の要素である意志・意欲は内発的動機づけと密接な関係があると考ええる。

本研究では、技術評価があるから学習するというように、学生にとって技術評価演習そのものが外発的動機づけになっていた。しかし、繰り返し練習し、学生同士で意見交換する中で、学生は患者を具体的にイメージし、安全・安楽やより良い援助を考えるようになった。これは教員の評価を受けるという外部からの刺激による外発的動機づけが、学生自らの内発的動機づけに変化したことで生じた学習内容や学習方法の変化と考える。さらに、上手になった、自信がついたといった自己肯定感が内発的動機づけを強化したと考える。

また、一定の学習成果を得るためには学習者のレディネスが整っていることが重要であり、古くから Gesell の自然成熟的レディネス観がある。一方、経験や学習から準備状態は形成されるとする Bruner のレディネス観<sup>13)</sup>がある。Bruner は、レディネスは形成していくものと考え、その方法としてらせん教育課程がある。Bruner のらせん教育課程は、低年齢の子供に発達段階にふさわしい方法で指導すれば、低年齢の子

供にも高度な教材を理解させることが可能であるとしている。そして低年齢の時にその年齢にふさわしい学習をしておけば、その学習内容が後で高度な学習レベルで再学習する際の助けとなるというものである。

看護基礎教育では卒業までに膨大な知識と技術を学ばなければならない。段階的に効率よく学べるようカリキュラムを工夫しているが、教養科目、専門基礎科目、専門科目の授業が同時並行的に展開される。1, 2 年次での学内での講義・演習が、その後の実習というより高度な学習の際に助けとなるような学習になるためには、臨床での看護実践を踏まえ、我々が実施した状況設定課題による技術評価演習に取り組むことは有効と考える。

学生は外発的動機づけから技術評価演習の学習を開始し、次第に内発的動機づけにより、学習を深めていった。これは学生の内なる変化である。このような変化には、状況設定課題のような学習上の刺激が必要である。状況設定課題による技術評価演習の学びが、その後の学習にどのように貢献したかは現段階では判断できない。しかし、学生の変化から状況設定課題による技術評価演習の学習は、学生のレディネス形成を促したと考える。

## VI. 結論

1. 学生は状況設定課題による技術評価演習に取り組むことで、技術の原理・原則、および目的や根拠の重要性に改めて気づいていた。
2. 学生は学習課題を自己の看護行為だけでなく、看護の対象である患者の立場で考えていた。
3. 学生は学習過程を振り返ることで練習不足、技術の未熟さなどに気づき、自らの学習課題や学習方法を考えた。
4. 状況設定課題による技術評価演習に取り組むことで、学生の学習の動機づけは外発的なものから内発的なものへと変化した。
5. 学生は学習成果に気づくことにより、看護技術の学習に対する動機づけを強化させたと考えられた。
6. 上記 1～5 より全単元の看護技術を対象とした状況設定課題による技術評価演習は、学生の看護技術学習に関するレディネス形成を促したと考えられた。

本研究の一部は、日本看護研究学会第 21 回北海道地方会学術集会で発表した。

## Ⅶ. 引用文献

- 1) 須田雅美, 田邊三千世, 福田里美, 他: 学生が技術練習後に記載する振り返り用紙から見えてきたこと～看護技術を効果的に習得していくための教員に関わりとは～, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 7, 1-6, 2011.
- 2) 野村晴香, 平瀬節子, 坂本雅代, 他: 基礎看護技術習得に向けた自己学習への取り組みの実態, 高知大学看護学会誌, 3(1), 45 - 49, 2009.
- 3) 中島正世, 吉川奈緒美, 市川重子, 他: 基礎看護学における技術試験方法の検討—11 課題の技術試験の結果から—, 横浜創英短期大学紀要, 5, 55 - 61, 2009.
- 4) 藤田佳代子, 弓削なぎさ, 川本利恵子, 他: 清潔援助の技術習得過程における自己評価と学習方略との関係, 産業医科大学雑誌, 30(1), 83 - 95, 2008.
- 5) 平野節子, 野村晴香, 高橋永子, 他: 基礎看護技術の学内演習における学生の困難さと対処行動—グループ学習を活用して—, 高知大学学術研究報告医学看護編, 55, 2006.
- 6) 三宅真由美, 土井英子, 杉本幸枝, 他: A 短期大学看護学生のカリキュラム変更後の援助技術自己評価—チェックリスト使用による役立ちとその課題から—, 新見公立短期大学紀要, 27, 151 - 158, 2006.
- 7) 大川美千代, 佐々木かほる, 金谷悦子, 他: 基礎看護技術習得のための学生の自主的学習活動—学生による教材選択の実態—, 群馬県立医療短期大学紀要, 12, 57 - 67, 2005.
- 8) 吉田礼子, 秋元とし子, 林真理子: 知・技・心の一体化をめざした基礎看護技術習得プログラム—プログラム作成プロセスおよび試行と評価—, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, 17-18, 9-19, 2009.
- 9) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学, 第 5 版, 医学書院, 212 - 214, 2012.
- 10) 舟島なをみ: 質的研究への挑戦, 第 2 版, 医学書院, 51-79, 2009.
- 11) 大学基準協会 看護教育研究委員会報告: 21 世紀の看護学教育—基準の設定に向けて—, 財団法人大学基準協会, 2002.
- 12) 吉本均編: 現代授業研究大辞典, 明治図書出版株式会社, 200-201, 1987.
- 13) J.,S., Bruner :The Process of Education, 1963, 鈴木祥蔵, 佐藤三郎訳, 教育の過程, 42 - 69, 岩波書店, 2002.

# **Experience that nursing students get from the nursing skills assessment practicum aiming to instill readiness for acquiring nursing skills**

## **-Report analysis done after the completion of a specified situation assignment during the first year of college -**

ICHIJO Akemi\*, KANNARI Yoko\*, MASUDA Yumiko\*

---

### **Summary**

The objectives of this study are to describe in detail what nursing students have learned and examine the progress of readiness for acquiring nursing skills by analyzing the reports submitted by students at the completion of the specified situation assignment in the nursing skills practicum.

Fifty-three first year nursing college students who gave written consent for participation were the subjects. Using the reports submitted by the participants after the nursing skills practicum as data, we conducted a qualitative and descriptive content analysis about learning situation, course assignment, future study method, and what they had noticed and learned from the practicum.

Findings from the analysis showed that students had conducted preliminary study, such as ‘discussion among students,’ ‘use of textbooks,’ and ‘repeated practice.’ Students regarded ‘thinking about patients,’ ‘giving serious thought to purpose and reason,’ and ‘improving skills’ as part of their practicum assignment. It was also found that students noticed or learned about ‘lack of practice,’ ‘insufficiency of skill acquisition,’ ‘importance of evidence,’ and ‘learning outcome.’ Pertaining to future study method, students affirmed the necessity of ‘practice and discussion with other students,’ ‘repeated practice,’ and ‘use of textbooks.’ It is suggested that evaluating one’s learning outcome objectively, and considering what and how to learn contributes to the readiness preparation.

**Key words** nursing skills, situation of nursing skill acquisition, readiness, motivation, nursing students,

---

\* Asahikawa Medical University, Department of Nursing